

AC公共広告機構 支援キャンペーン 自閉症の認知と理解について

アンケート調査報告書



(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会

平成19年 1月

イラスト 地域の扉・社会の扉が開かれることを願って！

AC公共広告機構 支援キャンペーン 自閉症の認知と理解について アンケート調査報告

(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会

はじめに

平成18年 7月 1日より、AC公共広告機構 支援キャンペーンの9作品の一つに「自閉症」が取り上げられた。1年間にわたり全国123社の新聞媒体による支援キャンペーンがスタートした。本調査のねらいは、自閉症の認知及び理解啓発のための新聞広告が実施されたことを機に、一般の人の自閉症に対する「認知と理解」が、どの程度進んでいるのかを調査し、この啓発活動から見えてくる課題を分析して、今後の日本自閉症協会及び北海道支部 道南分会が自閉症の認知と理解を推進する上での基礎調査を行うものである。

はじめに、(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会は、北海道支部に所属する13分会の一つに位置し、エリアは南北海道(渡島支庁・檜山支庁)であり、函館市(人口約30万)を中心に隣接する北斗市(旧上磯町と旧大野町の合併による)と、七飯町を含め近隣の16の町からなり、圏域内は車で片道2時間半のエリアである。広域ではあるが活動は函館市、北斗市、七飯町を中心とした会員(家族・支援者)が、自閉症児・者が地域であたり前に安心して暮らすことのできる社会を目指し活動している。現在会員は、支援者を含め約150人で組織している。活動内容は、地域の人を対象とした公開講座(年4回開催)・講演会・学習会・茶話会・本人のためのレクリエーション・広報誌発行等を行っている。広報誌は道南全ての幼稚園・保育園(一部地域を除く)・小中学校(市立、私立、国立)・養護学校(盲、聾、肢体不自由、知的、病弱)と、保健・医療・教育・福祉・労働の分野へ配布を行い、毎月1000部近くを配布し、自閉症の理解と啓発を行っている。

アンケート調査方法

【調査方法】.....調査は一般と会員に分けて行い、一般は非会員とし、普段仕事上で自閉症児・者と関わりのある人から、全く自閉症児・者と関わりのない様々な人に依頼した。
方法としては、事前にアンケート調査の趣旨説明に出向き、後日、連絡先・回収日等を記入した回収箱を持ち、再度依頼した。関係機関としては、保健・医療・教育・福祉・労働の分野の担当者に、任意でアンケートの協力を依頼した(道・市・町の各関係機関)。その他の一般は、道南分会の会員を通して個人的に民間の会社関係者や、会員のご近所の人や知人等に配布した。また社会福祉法人 侑愛会のご厚意により、侑愛会関係の3園の幼稚園・保育園には、全保護者にアンケート用紙を配布した。

【調査期間】.....平成18年 9月 8日～平成18年10月20日まで

【掲載新聞】..... 8月 1日 「聖教新聞」 5面掲載
8月29日 「北海道新聞」 朝刊14面掲載 道南地方のみ
10月 1日 「北海道新聞」 朝刊17面掲載 道南地方・十勝地方

調査期間中のみ掲載日の記載

北海道新聞の発行部数は全道では120万部、そのうち13万部が道南で発行。広域のため、全道一斉掲載にはならなかった。世帯占有率は全道では48%、道南では58%である。

道南では平成19年 1月15日現在で2紙に5回、「ひろと君」・「かねすけ君」両バージョンが掲載された。

アンケート 協力機関について

機 関	管 轄	番 号	機 関 名	備 考	
行政	北海道	1	北海道教育庁渡島教育局		
	北海道	2	北海道教育庁檜山教育局		
	北海道	3	北海道函館児童相談所		
	北海道	4	北海道渡島保健福祉事務所保健福祉部社会福祉課		
	北海道	5	北海道渡島保健福祉事務所保健福祉部子ども・保健推進課		
	函館市	6	函館市教育委員会		
	函館市	7	函館市福祉部中央福祉事務所障害福祉課		
	函館市	8	函館市中央福祉事務所子育て推進課		
	函館市	9	市立函館保健所健康増進課		
	北斗市	10	北斗市教育委員会		
	北斗市	11	北斗市民生経済部健康推進課		
	北斗市	12	北斗市社会福祉協議会		
	北斗市	13	北斗市総合分庁舎（旧大野町関係 教育委員会等）		
支援	七飯町	14	七飯町教育委員会		
	七飯町	15	七飯町役場		
	函館市	16	北海道 発達障害者支援センター あおいそら	社会福祉法人 侑愛会	
	函館市	17	渡島・檜山圏域障害者総合相談支援センター めいと圏域の担当者	同上	
	函館市	18	障害者生活支援センター ぱすてる	同上	
	函館市	19	函館障がい者就業・生活支援センター すてっぷ	同上	
	函館市	20	おしま地域療育センター	同上	
	今金町	21	今金町母子通園センター		
	北斗市	22	ファミリーサポートセンター		
	療育	函館市	23	うみのほし学園 職員	社会福祉法人 函館カトリック社会福祉協会
北斗市		24	つくしんぼ学級 職員	社会福祉法人 侑愛会	
保育	函館市	25	ちとせ幼稚園 職員		
	函館市	26	つくし園 職員	病院内保育園	
	北斗市	27	浜分保育園 職員	社会福祉法人 侑愛会	
	北斗市	28	七重浜保育園 職員	同上	
	教育	北斗市	29	ゆうあい幼稚園 職員	同上
		函館市	30	北海道教育大学附属養護学校 職員	国立
		七飯町	31	北海道七飯養護学校 職員	道立
北斗市	32	北海道七飯養護学校 おしま学園分校 職員	道立		
今金町	33	北海道今金高等養護学校 職員	道立		

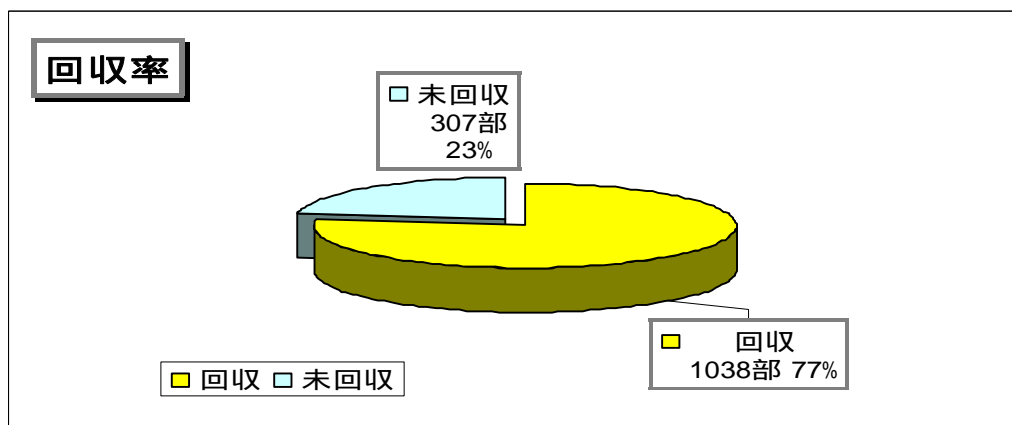
機 関	管 轄	番 号	機 関 名	備 考
一般	函館市	34	北海道教育大学函館校（学校教員養成課程障害児教育専攻3年・4年）	学生
	函館市	35	看護学校（1年・2年・3年）	学生
	函館市	36	うみのほし学園の保護者	
	北斗市	37	つくしんぼ学級の保護者	道南分会会員 6家族を除く
	北斗市	38	ゆうあい幼稚園の保護者	道南分会会員10家族を除く
	北斗市	39	浜分保育園の保護者	道南分会会員 1家族を除く
	北斗市	40	七重浜保育園の保護者	
	北斗市	41	北斗市 公開講座参加者（9月8日開催）	一般
	七飯町	42	七飯町 公開講座参加者（10月20日開催）	一般
	今金町	43	今金町 講演会参加者（10月5日開催）	一般
	函館市	44	函館どつく株式会社 社員とご家族	船の新造・修理の会社
	函館市	45	つくしんぼの会のコーチ	プールのサークル
	函館市	46	「みんなのさぼーたー わっとな」のボランティア	
	函館市	47	一般	
	北斗市	48	一般	
	七飯町	49	一般	

アンケート調査は、一般(非会員)と会員に分けて行った。一般の中には、(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会(以下道南分会)には所属していない当事者家族も多少含まれているものと推察される。会員については、自閉症の捉え方に関する項目などは省いており、一般のアンケート内容とは多少異なる。

支援機関、北海道 発達障害者支援センター あおいそら、渡島・檜山圏域障害者総合相談支援センター めい、函館障がい者就業・生活支援センター すてっぷ、おしま地域療育センター 各機関で道南分会会員(支援者)は、会員用のアンケートに回答した。

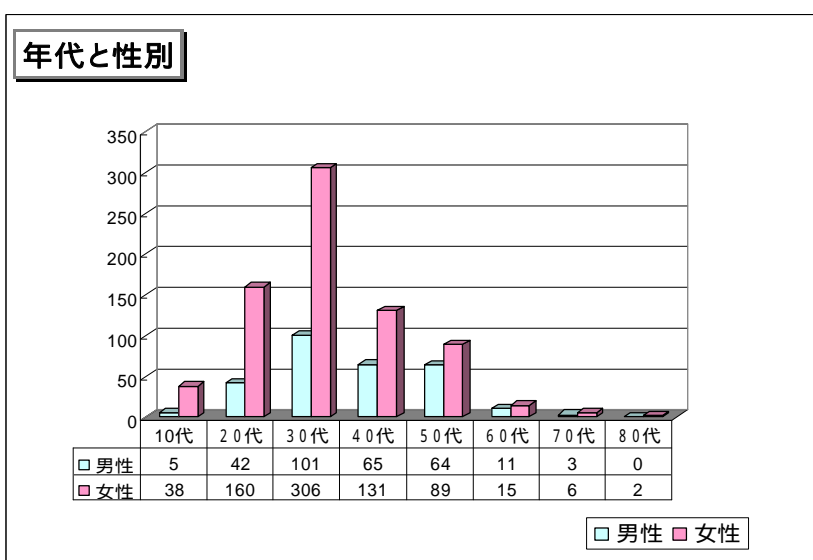
教育機関では、北海道七飯養護学校 職員で道南分会 会員(支援者)は、会員用のアンケートに回答した。また、北海道七飯養護学校 おしま学園分校職員は、道南分会 会員(支援者)が多いため、会員用で調査し一般用のアンケートは省いた。

〔1〕【全体の回収率】~図1 回収率は77% / 配布~1345部 回収~1038部 未回収~307部



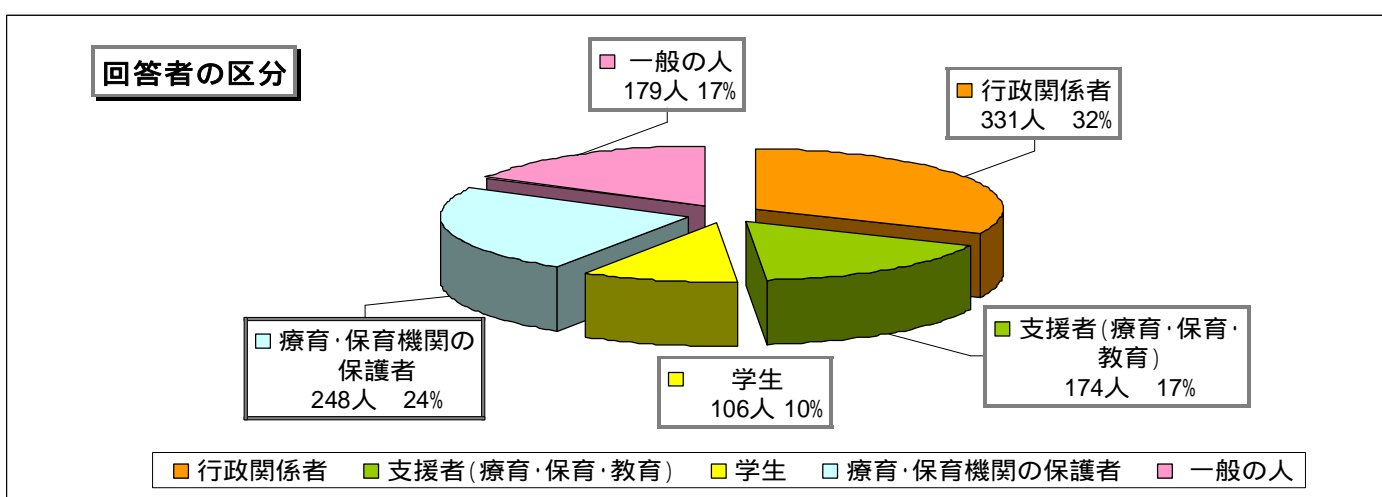
〔2〕【設問1~回答者の年代と性別】~図2

~表1



年代	人数	割合(%)
10代	43人	4%
20代	202人	19%
30代	407人	39%
40代	196人	19%
50代	153人	15%
60代	26人	3%
70代	9人	1%
80代	2人	0%
性別	人数	割合(%)
男性	291人	28%
女性	747人	72%

〔3〕【回答者の区分 その1】~図3



【回答者の区分 その2】

~表2

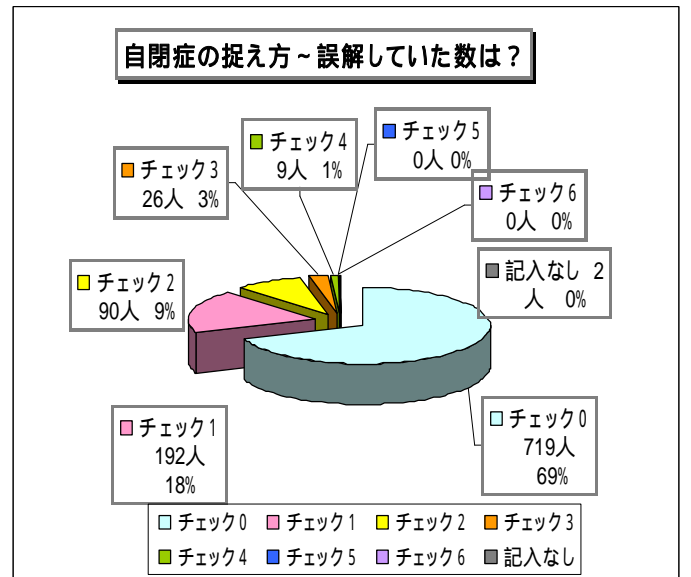
障害児・者との関わりについて	人数	割合%
(1) 普段、障害児・者と仕事で関わりがある(行政関係者・支援者)	505人	49.0%
(2) 普段、障害児・者と療育や保育機関の保護者同士、ボランティアで関わりがある	287人	27.5%
(3) 普段、障害児・者とはほとんど関わりがない(一般)	246人	23.5%

〔4〕【設問2～掲載広告を見て、自閉症について自分が思っていたことと、認識は同じかどうかを質問した。】

ほとんど同じだった 少々違っていた
 だいぶ違っていた

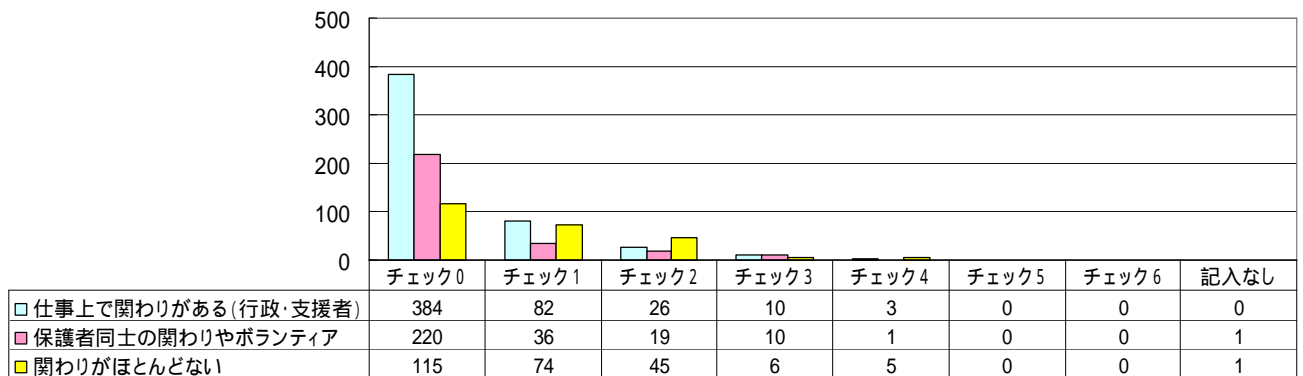
【少々違っていた・だいぶ違っていたという人は当てはまる箇所をチェックした（複数回答可）】

- 自閉症は、親のしつけが原因だと思う
- 自閉症は、病気だからいつかは治ると思う
- 自閉症は、引きこもりの状態だと思う
- 自閉症は、心の病だと思う
- 自閉症には、知的な発達の遅れが伴う人と、伴わない人等 様々な人がいるのは知らなかった
- その他（自由記述）

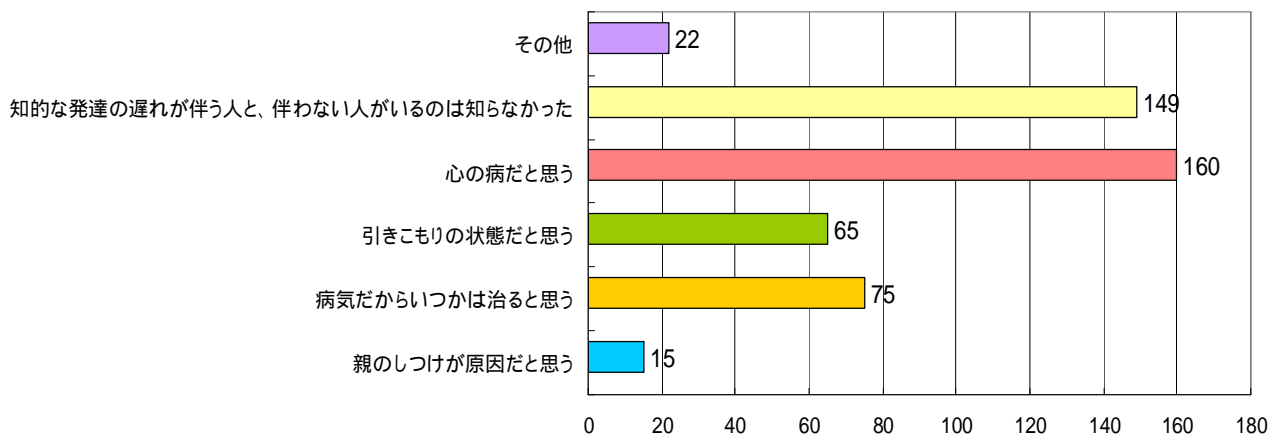


認識の違いでは、4項目にチェックをつけた人が9人いた ～図4

障害児・者への関わり方の違いによる自閉症の捉え方 誤解していた数は？ 図5



自閉症とは？ ～図6



自閉症についての認識の違い～道南では 心の病 知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいることを知らなかった（遅れを伴わない自閉症とは、高機能自閉症又はアスペルガー症候群のことをさす） 病気だから治ると思う 引きこもりの状態をいう その他 親のしつけが原因だと思ったとの順が多かった。

〔5〕【自閉症の認知及び理解について 考察 1】

自閉症の捉え方と理解について

障害児・者との関わり方の違いによる自閉症の捉え方と理解 *** 仕事上で関わりがある人 ***

回答者の区分別 による自閉症の捉え方と理解（全体）

図4より、回答者1038人のうち、自閉症の捉え方について誤解のなかった人(チェックがゼロの人)は、全体の69%(719人)であった。「自閉症は生まれつきの脳の機能障害」であり、なおかつ「心の病ではない」・「病気ではないから治らない(障がい)」・「ひきこもりの状態とは違う」・「親のしつけが原因ではない」・「知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいる」ということを理解していた。数値からみると自閉症への認識が高く、誤解が少ない。回答者の内訳では仕事上で関わりがある人(行政の担当者・支援者)と、保護者同士やボランティアで障害児・者との関わりがある人が、回答者全体の76%(792人)を占めているため、良い数値が出ていると思われる。そのため、本調査の目的とする自閉症にまったく関わりのない一般の人の自閉症の捉え方はみえてこない。

障害児・者との関わり方の違いによる 自閉症の捉え方と理解

次に自閉症について誤解のなかった人について、障害児・者との関わり方で数値に違いが生じるのかを比較したところ、仕事上で関わりがある人で75%、保護者同士やボランティアで関わりのある人では78%、普段障害児・者とはほとんど関わりがないと思われる一般の人で47%という比率で自閉症についての誤解がなかったという結果が出た。機関ごとのデータを集計してみると、統合保育を行っている三園の幼稚園・保育園の保護者(198人)は、一般票と想定し配布を行った。しかし結果はかなりの保護者が、障がいへの理解があることが判明したため、回答者の区分では仕事以外で障害者との関わりがあるという区分に繰り入れた。

行政側（公務員）・支援者側（民間）の違いによる 自閉症の捉え方と理解

次に仕事で障害児・者と関わる人を、行政の人と支援者では違いが生じるのかを調査した。自閉症の捉え方で誤解のなかった人(チェックがゼロの人)は、行政(公務員)では67%、支援機関(民間)では85%、教育機関(公務員)では98%であった。三者の違いは、日々の関わり方の差ではないかと推察される。また、行政側の回答者の中には、現在部署が違い直接の担当者でない人も含まれているため数値が低いと思われる。行政サイドの人には将来の配置換えにも対応できるように、「自閉症は生まれつきの脳の機能障害」であることを、所属部署にかかわらずすべての担当者に理解して、関わってもらいたい。また教育機関では、今回特殊学級・通常学級の教員には、若干名しか調査を行っておらず偏りが生じた。教育現場では、平成19年までに全ての小・中学校において特別支援教育の支援体制の構築を目指しているが、自閉症を有する多様な児童・生徒の教育的ニーズに添えていただくためにも、障害特性等をふまえた上での支援が必要となるため、通常学級教員も含めた全ての教職員を対象に、さらに自閉症についての研修を深めてもらいたい。それぞれの仕事上の関わり方によって、自閉症理解の求められる質や内容が異なっている。

自閉症の捉え方と理解 *** 普段、障害児・者との関わりがないと思われる一般の人 ***

一方で普段、障害児・者との関わりがないと思われる一般の246人のうち、自閉症の捉え方について誤解のなかった人(チェックがゼロの人)は、47%(115人)であった。一般のアンケート協力者は、会員を通じた知り合いが多い。本来は、一般の人の自閉症に対する認識を知る上で、街頭調査などを行うとよいが、アンケート内容の特殊性と回答に要する時間が10分程度かかることを考慮すると、現実問題として街頭調査は非常に難しい。このため実際には、一般の人の自閉症についての誤解は、本来はもっと多いものと推察できる。またこの調査での一般の定義とは、普段障害児・者との仕事上で関わりがないこと、保護者同士でないこと、ボランティアでないことで分けた。それ以外個人レベルで、障害児・者との関わりがあるかどうかは不明だ。

一般の246人のうち92人は、道南分会主催の公開講座等(地域の人を対象とした自閉症の理解を深める学習会)に、北海道 発達障害者支援センター あおいそらの講師から講義を受け、さらに道南分会会員の話を聞いた上でアンケートに答えている。大多数の人が、この時点で自閉症の捉え方に誤解はなかった。公開講座参加者への調査は、開始前に実施するべきであった。公開講座終了後のアンケート実施であったため多くの人に誤解がなく、このため一般票から公開講座参加者を除き分析をしなければならなかった。

〔7〕では公開講座の参加者、障害児・者と仕事上で関わりのある人、保護者同士やボランティアで普段何らかの関わりのある人を除いて、普段障害児・者と関わりがないと思われる一般だけを調査した。

〔6〕【自閉症の認知及び理解 自閉症の捉え方について 考察2】

自閉症について誤解していたこと

図6の調査結果から自閉症の原因は、「心の病だと思う」と回答した人が一番多く回答者の15%(160人)、次に多かったのは「知的な発達の遅れを伴わない人(高機能自閉症又はアスペルガー症候群)がいるのは知らなかった」14%(149人)、「病気だからいつかは治ると思う」7%(75人)、「引きこもりの状態だと思う」6%(65人)、「その他」2%(22人)、「親のしつげだと思う」と回答した人は1%(15人)であった。誤解していた人をパーセンテージにすると数値が小さく、道南は自閉症についての誤解が少ない。全体の回答者のうち76%(792人)の人が、普段障害児・者と仕事上で関わりがある人と、保護者同士やボランティアで関わりがあるため非常に良い結果となっている。回答者の多くが、自閉症児・者と関わりがあるため、この結果からは、一般の人の自閉症の認知と理解がどの程度進んでいるかがわからない。そのため、本調査の目的とする一般の人の自閉症の認知と理解を知るために、普段障害児・者と関わりがある人と、関わりのない一般の人を分けて、データを再分析した。

〔7〕 参照

道南における自閉症支援の現状

一方「親のしつげだと思う」と答えた人が非常に少なかったのは、ここ道南には全国的にも有名な“社会福祉法人 侑愛会 おしまコロニー”があり、おしまコロニー内には、「おしま学園(知的障害児施設)」・「第二おしま学園(第二種自閉症児施設)」・「星が丘寮(知的障害者更生施設)」が設置されていることも理由の一つと考えられる。

星が丘寮(成人の自閉症者が多く利用している)では、利用者に対し施設外事業所での就労サポートを進めている。この取り組みや事例については本に紹介され、各地の講演会等で実践報告がなされている。そのほか、おしま学園では、年に10回の母子療育(今年度は各回3組)で、中3までの親子をショートステイの枠で受け入れ、生活全般の相談や家族支援を行っており、参加者からの母子療育の人気と評価はとても高い。また、おしま地域療育センター(社会福祉法人 侑愛会で運営)では、発達障害の早期診断、早期療育及び、ライフステージに応じた相談支援に加え、要請を受けた地域へ専門職員を派遣し支援を行っている。そのほかにも、毎年「自閉症セミナー」も開催されており、全国からたくさんの方が参加している。さらに毎月発行の機関誌「ゆうあい」でも、多くの情報や実践が紹介されている。おしまコロニーの長年の取り組みが、道南を中心とした自閉症支援の基盤となっていると言っても過言ではない。「親のしつげだと思う」という項目への回答率1%という数値からもおしまコロニーによる長年の啓発効果が表れている。

親の会については、以前はそれぞれの親の会が小グループで活動していたが、平成16年度より一本化され(社)日本自閉症協会 北海道支部 道南分会として再スタートを切った。これを機に、地域の人を対象とした公開講座(年4回)・講演会・学習会・茶話会・広報誌発行(年3回、道南の保健・医療・教育・福祉・労働の各分野に、会員も含めると毎号約1000部配布)を通し啓発活動を続けてきたことも、おしまコロニーの長年の取り組みとあわせて、相乗効果につながったと推察できる。

しかし今回の調査地域は、函館市・北斗市・七飯町・江差町・今金町に限られており、道南の残り13町については調査していないため、この認識は道南の地域によって格差があり、地域によっては「親の育て方」という認識は、まだまだ根深くあると思われる。

道南における教育現場での現状と課題

2003年3月文部科学省では、通常学級に在籍する児童生徒の中に発達障害が想定される数値を、6.3%と公表している。40名クラスでは、2名～3名が該当する計算になる。従来自閉症をはじめとする発達障害を明確に規定した法律はなかったが、平成17年4月1日「発達障害者支援法」が施行に伴い、平成19年度までに全ての小・中学校において高機能自閉症・LD・ADHD等の児童生徒に対し、一人ひとりの教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う「特別支援教育」への転換を図るとしている。全国の保健所・児童相談所・教育委員会では、老人福祉・虐待・いじめと履修問題という緊急性の高い問題を抱えており、障害児・者への支援は、緊急性が表面的にはみえないことから先送りされていると感じる。生涯一貫性と継続性のある支援が必要であり、保健所・児童相談所・教育委員会が抱えている問題と障害児・者の問題も併せて訴えていく必要がある。特別支援教育については、道南分会でもさらに学習し知識を深め関係機関と連携を図りたい。

道南分会の支援者を対象とした学習会では、幼稚園・保育園の先生方のアンケートから、自閉症の兆候があると思われる子への関わり方の難しさや、気がついていない保護者への対応や専門の診断機関への受診の勧め方で、苦悩しているとの記述が複数あった。同じような悩みは学校現場でも、どのような支援や配慮をするべきか、先生方の悩みは深いと伺った。また、兄弟児のクラス参観に行き、クラスで気になる子の存在が最近道南分会でも話題にでる。保護者が少しでも自閉症をはじめとする発達障害について知識があることでいくらかの気づきにつながるのであれば、全保護者を対象に、あるいは現場の先生方にも気づきのポイントとなるような情報を、パンフレットや広報活動を通して行政側(保健所・児童相談所・教育委員会)からも発信してほしいことや、「特別支援教育について」の情報を全保護者に周知徹底してほしいと考え、11月下旬、道南分会 会員(支援者)の函館市議会議員 小山直子先生にこの件の陳情を行った。より良い発達支援のために専門機関と連携することで、将来の可能性やリスクに備えることができる。高機能自閉症又はアスペルガー症候群を疑われる場合は明らかな知的な遅れがないため、親や支援者からも気がつかれずに見落とされ、年齢が高くなるまで診断を受けていないケースもあると聞く。先生方に配慮いただきたいことは、専門機関(診断)への受診の勧めは、自閉症をはじめとする発達障害が疑われる幼児・児童・生徒の差別化を図ることではなく、ちょっと気になるクラスの子どもへ、より良い支援や配慮をするためにという認識を持って行ってほしい。大事なことは保護者との信頼関係があること、勧めるタイミングもあるのではないかと思う。

最近道南分会に入会する会員には、子どもが高機能自閉症又はアスペルガー症候群との診断を受けた入会者も多い。また道南分会に寄せられる相談には、学校内での教育内容に関することも増えており、なかには転校を視野に入れなければならないケースや、対応がうまくいかない原因を、子どもの側に持ち込まれ対応に苦慮することもある。他に高機能自閉症又はアスペルガー症候群の場合は明らかな知的な遅れがないため、支援者の理解が得られずに不適応行動や、なかには不登校になるケースもある。地域の中には、頑張っている学校や先生もおられるが、対応が適切でないと感じるときには子ども自身も混乱しこだわりが強くなったり不安定になりやすい。これらは特別支援教育への学校現場の混乱なのか、支援体制の不備なのか、支援者の専門性と資質の部分なのか、検討を行い対策を考えたい。特に高機能自閉症又はアスペルガー症候群の人へ、すぐに対応できる専門性や知識を有する支援者が不足していると感じる。また知的に重度な人への対応も、相談内容から適切な支援とは思われないと感じることもあり、一人ひとりの教育的ニーズにあわせた支援をしてほしい。そのため子ども達が学校内で安心し、自分に自信と誇りを持って生活するために学校と家庭の連携が大切であり、子どもの情報を共有し、支援者間では共通理解のうえ一人の子には同じ対応と、移行する場合には引き継ぎと継続をしてほしい。教育現場では特別支援教育の推進のため、先生方向けの勉強会が度々開催されている。道南分会学習会へも特別支援教育コーディネーター(教員)の参加や、教育関係者からの特別支援教育に関する講演依頼が道南分会にも増えており、共にがんばっていききたい。

支援は学校生活の12年間で完結するものではなく、子ども達が生涯にわたり関わる機関へは、機関が移行しても「一貫性」「継続性」「連携」のとれた支援と配慮が必要なことから、一般の人の啓発と併せ今後も働きかけを行いたい。支援者の多くは、自閉症の人の持つ弱さ、「社会性の障害」・「コミュニケーションの障害」・「想像力の障害」はご存知でも、本人と親の求めているニーズと合致しないことがある。障害特性、発達段階、卒業後など将来に見通しを持ち実態に即した支援をしてほしい。特に『心の育ちと学びの保障』『就労の保障』『地域生活への支援』『余暇支援』が大切であり、兄弟児へもサポートが必要なきがあると感じる。

〔 7 〕 【 普段、障害児・者と関わりがないと思われる一般の人の自閉症の認知と理解についての調査 】

全回答者1038人のうち、仕事上で障害児・者と関わりのある人と、保護者同士やボランティアで関わりのある人がアンケート全体の76%(792人)を占めている。本調査の目的とする一般の人の自閉症の認知と理解を知るために、普段障害児・者と関わりのない一般の人だけでデータ分析を行った。

【 集計対象 】 普段障害児・者と関わりがないと思われる一般の回答者は246人である。そのうち、公開講座の参加者は、92人であり246人から92人を引いた人数、154人について回答を集計した。

(注) 道南分会主催の公開講座の参加者は、北海道 発達障害者支援センター あおいそらの講師から自閉症について講義等を受け、道南分会会員の話を聞いた上でアンケートに答えたため大多数の人が、自閉症の捉え方に誤解はなかった。このため一般のデータから除いて分析した。

一般の人が、自閉症について誤解していたチェック数は？

表 3

一般(チェック数)	0	1	2	3	4	5	6	記入忘れ
人数(全体154人中)	53人	51人	39人	5人	5人	0人	0人	1人
割合(%)	35%	33%	25%	3%	3%	0%	0%	1%

チェック項目は表4参照 (チェックがゼロの人は、誤解のない人)

【 一般の人 ~ 自閉症の認知及び理解 考察 3 】

表3より、一般の回答者154人のうち、自閉症の捉え方について誤解のなかった人(チェックがゼロの人)は、全体の35%(53人)であった。反対に誤解していた人は65%(101人)である。全回答者1038人で誤解のなかった人を見ると、普段障害児・者と何らかの関わりがある人がアンケート協力者に多数いるため、一般の人の認知と理解がどの程度進んでいるのかわからなかったが、一般のみで調査を行うと、35%(53人)の人が自閉症の捉え方に誤解がなかった。しかし置き換えて考えてみると、地域の人3人のうち2人は、自閉症について何らかの誤解をしていたことになる。

また全回答者1038人のうち、自閉症の捉え方で誤解のあった人(チェックがついた人)は、最高では4項目に9人がチェックをつけた。一般回答者154人では、4項目にチェック(誤解した箇所)をつけた人は5人いた。全回答者9人のうち一般では5人と半数以上を占める。このことから自閉症の認知と理解があまり進んでいないこと判明した。次は自閉症について、一般の人はどの項目で誤解が多かったのかを集計した。

自閉症について誤解していたこと(チェック項目の内容)

表 4 (複数回答可)

【設問】自閉症について自分が思っていたこと(認識が違った点は?)	人数(全体154人中)	割合(%)
自閉症は、親のしつけが原因だと思う	4人	3%
自閉症は、病気だからいつかは治ると思う	29人	19%
自閉症は、引きこもりの状態だと思う	27人	18%
自閉症は、心の病だと思う	50人	32%
自閉症には、知的な発達の遅れの伴う人と、伴わない人など様々な人がいるのは知らなかった	49人	32%
その他(自由記述)	5人	3%

【 自閉症の認知及び理解 考察 4 】

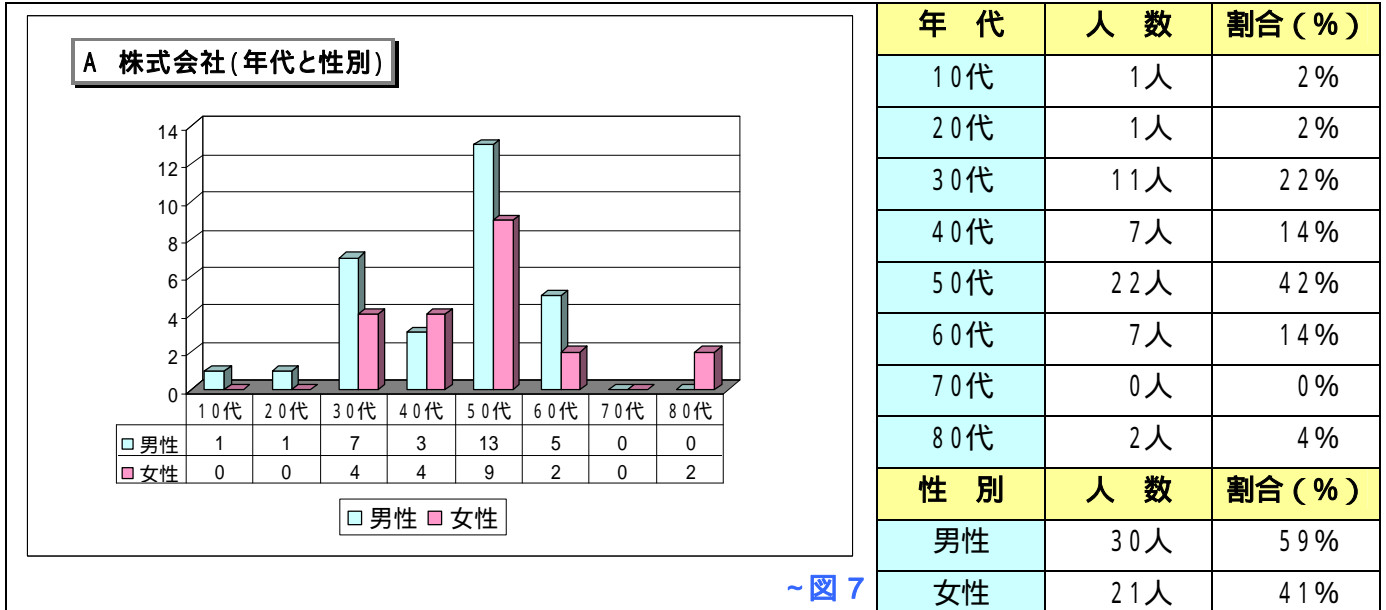
表4では、一般の回答者154人に自閉症についてのどのように認識しているかを質問した。「自閉症は心の病だと思う」と回答した人は32%(50人) 「知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいることを知らなかった」と回答した人は32%(49人) 「病気だから治ると思う」と回答した人は19%(29人) 「引きこもりの状態だと思う」と回答した人は18%(27人) 「その他」は(自由記述)3%(5人) 「親のしつけが原因だと思う」とした人は3%(4人)との順に多かった。しつけが原因だと思うと回答した人は、普段何らかのかたちで障害児・者と関わりがある人も、関わりがない一般の人も調査対象地域では誤解が非常に少ないという同じ結果がでた。しかし については、高い数値が出たため、さらに一般から2機関を抽出して考察を深めた。

〔 8 〕 一般の人（ 普段、障害児・者との関わりがないと思われる人 ） 協力2機関

協力者（ 1 ） A 株式会社（ 新造船や船の修理をする会社の製図部門の技術者とご家族 ）

52 部配布 51 部回収（ 回収率 98% ）

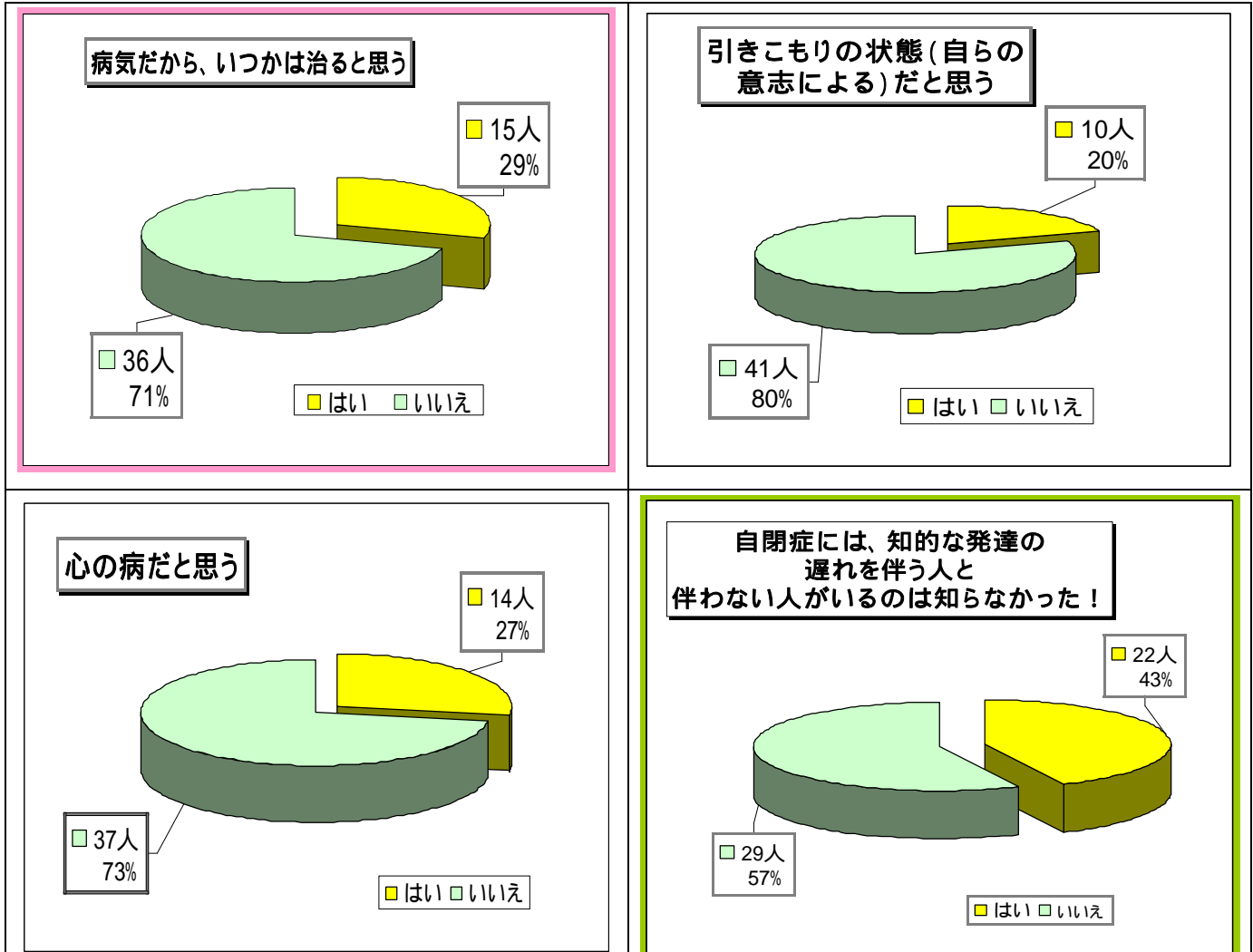
～表 5



～図 7

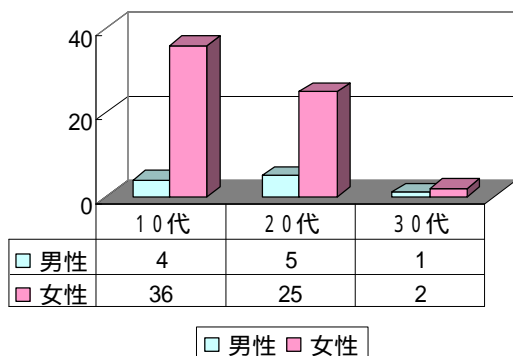
【 設問 2～自閉症について、自分が思っていたことと認識の違いを質問した 】 A株式会社

～図 8



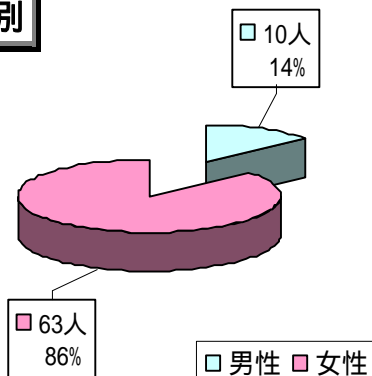
* A 協力機関は男性の職場であるが、一緒に家族や知人など幅広い年齢層が回答した。A機関からは、年齢が幅広いことで地域の縮小版ともいえる縮図がみえ、道南地域の実態がみえる。 ～考察5 参照

B 看護学校(年代と性別)



~図 9

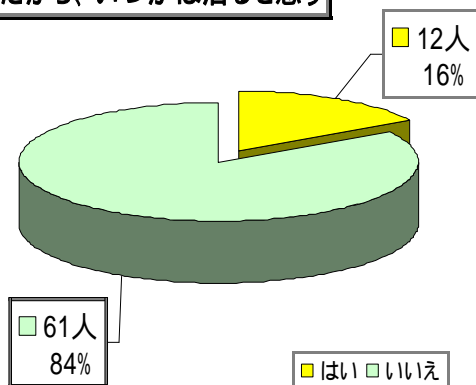
性別



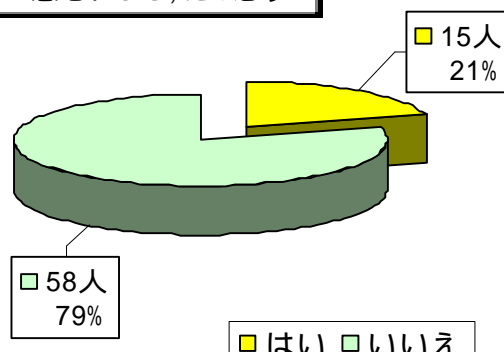
回答者は若い女性が圧倒的に多い ~図 10

【設問 2 ~自閉症について、自分が思っていたことと認識の違いを質問した】 B看護学校 ~図 11

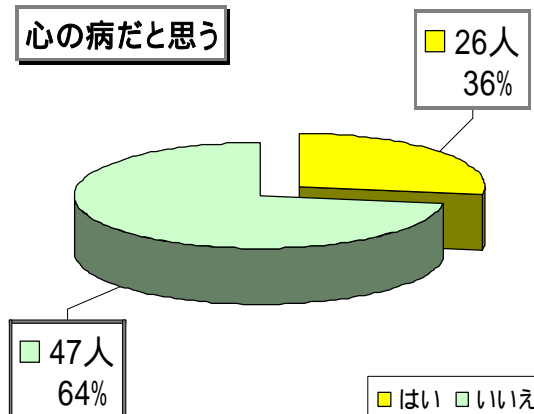
病気だから、いつかは治ると思う



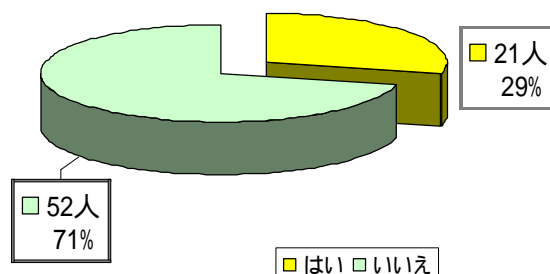
引きこもりの状態(自らの意志による)だと思う



心の病だと思う



自閉症には、知的な発達の遅れの伴う人と伴わない人がいるのは知らなかった!



* B 協力機関は、10代後半から30代前半の看護学生より回答を得た。回答者の多くは女性で、若者の実像と将来の医療従事者として、また同じ学生でも教員養成課程の学生との違いについても考察した。考察5 参照

アンケート調査でいう一般の人の定義.....

仕事上で関わりがないこと・同じ保護者同士でないこと・回答者がボランティアではないことで一般とした。それ以外個人的に、障害児・者と関わりがあるかどうかは不明だ。

〔 9 〕 【 一般の人の自閉症の認知と理解について ~ A・B協力機関を通して見えてくること~ 考察 5 】

A・B 協力機関 のデータ

~表 6

協力機関で答えている年代	病気だから 治ると思う	引きこもりの 状態だと思う	心の病 だと思う	知的な発達の遅れの伴わない 人がいるのは知らなかった
A機関~10代から80代まで(51人)	29%	20%	27%	43%
B機関~10代から30代まで(73人)	16%	21%	36%	29%

表6より、AC新聞広告の内容では、高機能自閉症又はアスペルガー症候群については触れていないが、あえてチェック項目に加えた。A・B両機関とも、「知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいるのは知らなかった」と回答し、両機関とも多くの人は、高機能自閉症又はアスペルガー症候群のことを知らなかった。A機関では30代から60代が回答者の92%を占めており、全体では43%が知らないという非常に高い数値がでている。B機関では10代から30代までの若い世代が回答しており、A機関と同様の結果が得られた。両機関の回答者の年代からは、10代から60代まで幅広く捉えることができ、これらの機関のデータは、地域の縮小版ともいえる。このため一般の人の自閉症の認知と理解は、A・B両機関からかなりイメージすることができる。表6からはそのほかに「自閉症」という漢字の構成イメージから、人との関係を持たずに引きこもりの状態と誤解を受けやすいことがわかる。少数ながらアンケートの記述の中では、「自閉症」という言葉に関する見直しをするべきではないかという指摘もあった。同じく漢字の持つイメージでは高機能自閉症についても、“高性能”や“能力が高い”と誤解が生じやすく、一般の人のなかには、高機能自閉症について特別な支援や配慮を必要としない人と誤解してしまう例が報告されている。ほかにA・B両機関とも、「心の病」「病気だから治る」と捉えている人が多く、看護学生では36%が「心の病」と誤解しており、A機関でも27%と数値が高い。「病」とは、治療によって多くの場合は治癒するという捉え方であり、「病だから治る」という捉え方で社会一般に根強く誤解されていることが判明した。また、「自閉症は親のしつけが原因ではない」と数値上では誤解が少ないが、実際には自閉症児・者が外出先で困難なことがあった場合、その場に居合わせた地域の人からは、わがままな子や親の育て方などと、環境的な要因が原因かのような冷ややかな視線を感じることもあり、数値上では自閉症の原因はしつけではないとした結果とのギャップを感じる。待てないことや理解できないことは、障がいのため経験の積み重ねなど時間を必要とすることが多いことを理解して、社会が温かい目で受け入れてくれたなら外出がしやすい。

看護学生の自閉症や発達障害に関する講義は、各校の指導教官の考えによるところが大きいようで、ほとんどは、小児科一般教養の中で少しの時間で扱う事が多いと聞いた。今回の調査を終えた後、道南分会会員(家族)の小児科医が教官であったため、正しい理解が得られるように自閉症及び発達障害全般について講義を行ってもらうことが出来た。アンケートに協力した看護学生については、講義後にアンケートを再度実施していれば違った結果が得られたはずだ。将来医療に携わる者が自閉症に対する正しい理解や認識を持つことで、受診や看護がよりスムーズに行われることが期待できる。幼児・学齢期によく通院する科の医療従事者の中にも、障がいに対する理解が十分とは思われず、自閉症児・家族が困惑した話も耳にする。今以上に自閉症に対しての理解が得られるように、今後も啓発活動を広め継続していくことはとても重要だ。図9~11 参照

また看護学生と同じ年代の北海道教育大学附属養護学校で実習中の、北海道教育大学函館校 学校教員養成課程 障害児教育専攻3年・4年の学生にも調査を実施した。28人全員からチェック項目が一つもあがらず、正しい理解のもと教育実習が行われていた。看護学生も教員養成課程の学生も共に将来は、医療・教育の分野で自閉症児・者と関わりが生じる。教員養成課程の学生は、函館はサマースクール発祥の地であり、毎年障害児教育専攻の学生を中心に組織ができ、この10年間小学生から高校生まで、障がいのある児童生徒の夏休みに1週間余暇支援を行ってきた。普段から学生は、ボランティアで子ども達に関わっており結果は予測された通りであった。教員養成課程の学生と看護学生の対照的な回答結果から、障がいについて学び、障害児・者と実際にふれあう機会があったかどうかの差は非常に大きいことがわかる。アンケート協力者の多くは、アンケートに回答したことで「自閉症は生まれつきの脳の機能障害」であることを理解した。次はどのように、自閉症児・者と関わりを持ち、困っているときにはどのような支援をしてあげると良いのかといった、関わり方についての問いかけに答えるために啓発活動の中身が求められており、日本自閉症協会及び道南分会が応える努力をしなければならない。

アンケート調査から 一般の回答者からみえてくる 道南分会の現状と今後の課題

一般の回答者は、246人であった。そのうち大口の機関は、公開講座・講演会の参加者、A・B協力機関とB機関の看護学生3年生分の5部を差し引くと、一般の個人配布はたった25部という計算になる。回収した1038部のうち、一般に個人配布できた数値は全回答者の2%にすぎない。結果が見えて大変驚いたが、障害児・者の家族の周りには、身内、同じ障害児・者の親、支援者、ボランティアが多く、社会との接点が少なく、一般の知り合いが非常に少ない現状が今回の調査でわかった。一部に仕事をしている親(自営業を除く)もいるが、母親が仕事を持つためには、子どもが軽度であるか、非常に恵まれたサポートがある等条件がそろわなければ実現しない。同時に障害児・者の親が社会との接点が少ないのは、道南だけではなく全国の親に共通する問題だと思われる。

では障がいを持たない同じ年代の子どもを抱える親たちが、社会との接点をどこで持つのか？多くは、親自身(母親)が仕事をする事、自分の趣味や子どもの学校活動(役員)の中で人間関係の広がりがあると考えられる。ところが、障害児・者が家族にいと、送迎のことや留守番が一人できないこと等諸問題があり家を空けられない。様々な要因から、多くの母親は仕事が持てない。そればかりか、子どもが小さいときほど親自身が自分のために、病院・美容院・買い物・冠婚葬祭等の外出が困難であると訴えている。

過去に、平成12・13年度厚生科学研究 障害保健福祉総合研究事業 障害児の発達支援の在り方と市町村との関係に関する研究報告書(主任研究者 岡田喜篤)でもすでに報告がなされ、道南分会会員(母親)2名も研究協力者として参加した。この研究は2年間で全国3カ所を調査し、市町村の対応、在宅支援、障害児支援における児童相談所と市町村の連携について調査し展望を報告した。その中で、道南の障害児の親・兄弟児にアンケート調査を行った。その結果、当時から障害児・者が家族にいと普通の家庭ではあたり前にできることも簡単には実現しないこと、兄弟児にも不都合が生じる場合もあると兄弟自身も伝えている。その点などもふまえ、地域にはどんな課題と支援を必要とするのかを調査し今後の展望を報告した。この時にも、かなりの子育て支援がなければ、現実的には母親の就労は非常に厳しいと感じた。また第一子が障害児の場合は、一人っ子の家庭も多く必然的に社会は狭くなる。調査を行い、改めて多くの母親が就労できていないことに気がついた。一般の知人・友人が少ないことも、自閉症の理解・啓発が進まない大きな要因となると推察できる。

また就労については、道南分会会員の子どもの年代構成から、幼児から養護学校高等部に在籍している家庭が多く、成人は少ない。このため就労については会員を通して、就労先(職場)や就労している会員のデータを集めることが出来ない現状がある。成人会員が少ないため道南分会として実態を探れないこと、労働の分野にアンケート配布ができなかった点にも問題がある。

〔9〕【 A C 広告が掲載されて感じたこと、またどのような行動をとったのかを調査した 】

(当てはまる項目にチェックを入れた)

複数回答可

A C 広告がとても印象に残った

A C 広告を見て驚いた(自由記述より考察すると...)

・新聞広告に載せなければ自閉症が理解されないことに驚いた

・A C 公共広告機構という、環境問題とか生命にかわるような大きな問題を取り上げており、その中の一つに自閉症が選ばれたことに感激した

(両方の記述があった)

後日、家族や職場でこのA C 広告の掲載紙のことを話題にした

スクラップやコピーを取った

見逃したので見せてもらった

電話やメールで知らせた

から の順に回答が多かった

A C 広告が、たくさんの人によって家庭・職場・学校で話題になったことは、啓発の第一歩である。A C 広告が掲載されたことで、改めて啓発について考えさせられた会員が多かった。

掲載について～道南では、平成19年 1月15日現在2紙に5回掲載された。掲載新聞を見た大多数の人は北海道新聞でAC広告を見ており、北海道新聞には4回掲載された。ひろと君3回・かねすけ君1回であり、8月29日・10月1日・10月30日・1月14日に掲載された。一般扱いの広告では、紙面半白黒掲載の費用は、道南に掲載された場合13万部では78万(税別)かかることがわかった。何度も掲載して下さることに対して、10月中旬に北海道新聞社 本社広告局へお礼状を送付した。調査では、1回目AC広告の掲載紙を見落とさなかったほとんどの人が、自宅で新聞を読んでいるときに気がついており、職場、学校の順となっている。また、掲載紙を見逃した人は、一般と会員では調査で対照的な結果となった。会員では見逃しが少なく、反対に一般の人は見逃しが多かった。両者の違いは、会員は掲載された日のうちに会員同士情報交換を行った結果であり、ここから学ぶべきことは1度のチャンスをうまく生かすことだと思う。各分野へはAC広告が掲載されたら、お知らせを入れることで解決できる。道南分会でも、できる範囲でお知らせをした。今回見逃した人は、アンケートに協力し内容を読むことで自閉症は生まれつきの脳の機能障害ということは理解してもらうことができ、アンケート調査そのものが啓発活動の一環でもあった。また11月中旬、道南分会ではAC広告ポスターの掲示活動を実施した。ポスターの効果は人目につく場所を選ぶことで大勢の人の目に触れ、新聞広告とあわせさらに相乗効果が期待できる。

*** AC広告の効果 ***

効果はすぐに目に見える形では表れにくく、メディアを利用した啓発活動については長期的に取り組む中で見えるものと、意識などの変化は、目に見える形でなかなか表れないものがある。また、各地域の啓発活動と連動しており、結果と考察は道南分会と同じ結果になるものと、地域により異なるものもあると考えられる。今後の課題は、啓発活動について日本自閉症協会で共通する課題と、地域での課題が別にあると考えられるため、各地域でも同様の調査が行われると良いと思う。

またテレビCMで「AC～」という音楽で思い出す人も多くいると思うが、AC公共広告機構のもつ使命は、社会と公共の福祉に貢献することで知られており、「地球の環境に関すること」や「人の命」という重く大切な心を揺さぶるテーマを中心に長年社会貢献をしている。その中の一つに、今年度「自閉症」が取り上げられたことで、今回のアンケート調査に勢いがついた。『ACというネームバリューの重みと恩恵を受け』調査ができたこともとても心強く、10月中旬調査が滞りなく終了した。その間に、AC公共広告機構と電通にお礼のメールを入れた。皆さんから、とても温かな心からの励ましの応援メッセージが道南分会に届いた。その後、制作者の温かく熱い自閉症に対する思いを広報誌9号に掲載した。

11月中旬、自閉症協会に所属する日本中の親たちが、笑顔のかねすけ君を抱え、ポスター掲示のお願いに行った。ポスター掲示という同じ活動を、協会として連帯できた意義はとても大きいと感じる。8月末、AC広告が掲載されたことからスタートした一連の活動ではあったが、啓発について道南分会なりに考え行動ができた。

*** アンケートの自由記述に関して ***

約63%の人から自由記述に協力をいただいた。内容の多くは、大半が今回の啓発活動に賛同し継続を希望する意見、広告の内容について踏み込んだもの、少数ながら道南分会への要望と応援メッセージの3つに大別される。アンケートに協力いただいた行政の担当者・教員・支援者・ボランティア・同じく子育て中の保護者・一般の人の自閉症協会への思いを重く受け止め、できることを一つずつ解決しながら道南においてさらに働きかけを行っていきたい。高齢化が進み、老人問題は我がことのように重ねられるのは、将来の自分に置き換えることができるからである。一方、「目に見えないわかりにくい障害といわれている自閉症！」ではあるが、アンケート協力者の自由記述から道南分会に求められていること、自閉症について誤解されていたこと、理解できたことを学ぶことは大変意義があった。これからも自閉症児・者が地域であたり前に安心して暮らしていける社会をめざし、がんばりたい。

またアンケート自由記述最後の、会員 支援者の記述は、私たち親の気持ちを代弁するような言葉だ。全ての、自閉症児・者に関わる人へのメッセージと思い掲載した。多くの支援者が心に刻み、親も支援者の一人として、子どもたちの心の声に耳を傾けなくてははいけない。

自由記述

「自閉症になったんじゃない。自閉症に生まれてきただけ」というキャッチコピーが、とても印象的だった。また内容がシンプルにまとめられていて大変わかりやすかった。(各機関 多数)

広告全体のセンスが良く、自閉症の子の特徴を捉えています。見たままの自閉症の雰囲気が出ていて、プロってすごいなと思った。(各機関・多数)

彼らは、限られた自己表現の手段の中で、精一杯自分を主張している。私たちが見ている社会の角度を少し変えてみているに過ぎない。私たちが、もう少し心にゆとりと柔軟性を持つことで完全ではなくても彼らのことを理解できると思う。(行政)

自閉症に限らず大切なことは、正しく理解されること、そして関心を持つこと。社会の中の差別や偏見のものは、無関心と無理解。気づく、知る、関わる機会を社会の中に意図的に作る必要があると思う。(行政)

私は、ひろと君やかねすけ君と同じ世代の子どもたちの教育に携わっています。広告を見て、少しでも多くの人に自閉症という障がいの存在を理解してもらえるといいなと思いました。その一方で、「自閉症の子どもたちは、地域の一般の人々からどんな理解や関わりがあれば暮らしやすいのか？」について、「こんな関わり方をすると良い」といったメッセージ性が強くあって欲しかったとも感じました。見えにくい障がいであるからこそ、正しく理解することを大事にしたいですし、この地域で一緒に暮らしていきたい!(教員)

A Cのテレビ・コマーシャルはインパクトがあるので、CMになってテレビで放送されたらもっと良いなあと思った。新聞広告に掲載されたのを見て感動した。理解が少しでも広がって欲しい。(支援者)

時折、バスで自閉症の子を見かけます。乗客の中には、とても嫌そうにその姿を見ている人もいます。多くの人に、もっと自閉症のことを理解して欲しいと願っています。もしかしたら私たちが反対の立場だったかもしれません。(看護学生)

私にも息子がいるので応援したい気持ちはあります。以前「光とともに」というドラマで関心を持ちました。そのような機会を増やすことは、大事だと思います。身近にも自閉症の子がいて、それほど困った経験ではなく、少しのお手伝いが必要なだけでした。何かができるのであれば、ぜひ協力させて下さい。(看護学生)

生まれつきの機能障害だということは理解できたが、自分が自閉症の人に何ができるか考えても何も思い浮かばなかった。自閉症の人が安心して暮らせる社会とはどういう社会なのか示して欲しいと思った。(看護学生)

自閉症は病気ではなく「障がい」です。そして周りの理解が必要です...ということが多くの人に、浸透できるといいなと考えます。(講演会 参加者)

少しずつですが、自閉症に対して社会がいろいろな人にA C広告を通じて、わかってもらえる努力をし始めたと思います。(公開講座 参加者)

自閉症の子どもたちと関わらせてもらっています。それぞれ違うタイプの子供達に、関わり方を配慮し分かり合えたとき、何かを一緒にやり遂げたときの充実感と喜びがあり、ボランティアは生活の一部になっています。理解を示し、ふれあう機会が増え関心を持ってくださる人が増えて欲しいです。(ボランティア)

キャッチコピーが、心に強く重く響きました。広告を読むことによって、一人ひとりが自閉症を正しく理解することができれば、自閉症の人が社会の中で暮らしやすくなることだと思う。広告のシリーズ化が必要では？(一般)

自閉症は「病気」だと思っていた。アンケートではじめて「障がい」ということがわかった。「病気」と「障がい」の違いは大きい。治ることがないという文字を見て、何も知らなかった自分に気がついた。（一般）

自閉症について知識・認識が低いため、本人・親・兄弟姉妹が傷ついたり、悩んだり悲しく寂しい思いもしている。一人でも多くの人に理解して欲しいと思います。そうすればみんな、生きていくのが少し楽になるそう思います。（一般）

娘の通う幼稚園では、障がいのある子も一緒に通園しており、幼児の段階から、自然に認知しあえる環境に意義があると感じています。大人は、もっと積極的に知り、そして理解し受け入れる姿勢をとりたい。（幼稚園 保護者）

自分が子どもの親になってから「自閉症」が障がいということを知りました。それまでは「心の病」と誤解していました。今まで出会った障がいのある人の中に、自閉症だったと思われる人がいました。当時は今のような認識で関わらず、私のように誤解している人が世の中にはたくさんいると思います。親だけでなく子どもにも、自閉症について理解し助け合える環境を作っていければいいと感じます。（幼稚園 保護者）

掲載文を読んで、涙が止まりませんでした。理解して欲しいこと、伝えたいことはたくさんあるけれど、伝えたいことのすべてといえるような広告文でした。このアンケートがきっかけで、自閉症のことを質問されることが多くなりました。どの人も自閉症について詳しく知りたいと思うものの、障害児の親に聞くのは失礼だから聞いたらいけないと思っている人もいます。これからも広告が掲載され、自閉症の理解が深まってほしいと願っています。（会員 家族）

自閉症という障がいを理解してもらうことは、本人・家族の心の安定だけでなく、行動範囲も広がり本当に嬉しいことだと思っています。以前AC広告で、骨髄移植・うつ・エイズ等の広告を目にしたことがあり、優しい気持ちになり少しでも理解したい...と思いました。『自閉症』を多くの人に理解してもらう手段として、ぜひ新聞広告やテレビ・コマーシャル等で広めて欲しいと思います。（会員 家族）

新聞広告は非常に良いと思うし、テレビCMやインターネットCMでもいろいろ知ってもらうことはとても大事だと思います。点字ブロックの普及には、その障がいに対する理解があったからこそであれば、自閉症の人に必要で構造化の普及も、みんなに知ってもらえればあたり前になると感じています。（会員 支援者）

自閉症のことで多くの人に知って欲しいことは、一番目は「コミュニケーションの苦手さ」です。例えば常識的に「あれっ」と思われる行動があったとしても、その背景には、その本人が伝えたくて意味があってやっていることだと思っています。でも相手にはそれが伝わらず、変な目で見られたり、そこで本人はもどかしくて辛い思いをしています。周りの人が「もしかしたら？」と想像力を働かせるようになったら、本人・親・家族も少しは楽になれるのではないかと思います。「もし自分が自閉症で、自分の思いをうまく伝えられなかったら...」と考えさせるような、そんな効果的な広告に期待します。（会員 支援者）

「自閉症だから自閉症に合わせた支援が必要です」

支援センターに勤務してからこのことをなんとなく説明し続けてきた。

“なにやってんの！”（・・・そんなこといわれたってさ。）

“だめでしょ、そんなことしちゃ。”（・・・どうすればいいの？）そんな声にならない言葉がたくさんあることに気付いたのは就職して、この人たちと接する仕事についてからである。

一般にはあまりその大変さはわかりにくい。だから知っている人は訴え続ける。

自閉症だったら、伝わらなくてもいいの？自閉症だから困っていてもいいの？見えない障がいは他にもあるが、障がいがあることが重要なのか？その人はどんな見え方をしている、どういった解釈をしたのか。本当に一人ひとりにあった、適切な支援の必要性をこのポスターから感じさせられる。より多くの人たちに今回のポスターを「一見」していただきたいと願う。そして、「一見」した支援者は、かねすけ君の笑顔を絶やさないう努力すべきであると思うのである。（会員 支援者）

おわりに

*** アンケートのまとめ ***

1. 道南では、「社会福祉法人 侑愛会 おしまコロニー」の長年の啓発活動のおかげで、「自閉症の原因は親のしつけだと思う」と回答した人は少なかった。しかし一般の人では、「心の病」、「病気だからいつかは治る」、「引きこもりの状態だと思う」と回答する人も多く、「自閉症は、生まれつきの脳の機能障害」であることは、正しく理解されていない。自閉症という言葉は耳にするようにはなったが、地域ではまだまだ自閉症への誤解が多い。また、知的な発達の遅れを伴わない自閉症の人がいることは、あまり知られてはいなかった。
2. 一般への啓発が進まない要因に、障害児・者を抱えている母親の多くが、障がいにより起因する様々な理由から仕事を持つことができなかった。そのことにより、必然的に社会との交流範囲が狭くなり、同世代の親たちに比べると一般の知人・友人が少ないことが判明した。一般への自閉症の認知と理解が、なかなか進まない要因の一つといえる。
このことから、社会との接点が少ないため個人レベルでは、啓発はなかなか進まず、分会・支部・協会として同じ問題意識を持ち、啓発活動を進めるべきである。
3. アンケートを協力した一般の人から、「自閉症は生まれつきの脳の機能障害であることは理解した。次は、どのように関わったらよいのか?」といった、次のステップにいくためにどうしたらよいのかという、啓発活動の中身への問いかけがあった。さらに一般の人・同じく子育て中の保護者・ボランティア・支援者・教員・行政の担当者、それぞれにより啓発の質が異なるため、長期的に段階を踏んで取り組む必要があり、いろいろな人や社会が温かく迎え受け入れようとし始めたこのときが、とてもよいタイミングであると思った。

その他

今回の調査目的は、一般の人の自閉症に対する「認知と理解」が、どの程度進んでいるのかを調査し、この啓発活動から見えてくる道南分会の現状と課題を分析することだった。道南分会が知りたかった一般の人の基礎調査結果は得られ目的は達成した。今後は、普段子ども達が所属している機関について、自閉症の認知と理解についてどの程度理解され、適切な支援を得られているのかの調査を機会があれば行ってみたい。

調査を終えて、アンケートに協力してもらうことが一般への啓発活動の一環であり、そのことにより道南の現状と課題がとてもよくみえた。それぞれの関わり方により、啓発と自閉症理解の求められている意味・質・専門性が異なることがより鮮明になった。社会は、まだまだ私たちにとって開かれているとはいえないが、私たち親が発信し続けることで、地域を変えられると信じ、子どもと共に地域で歩んでいきたい。私たち親にとって、子どもたちの未来に何かを残してあげられるとすれば、それは人という財産を残し次へと人をつないでいくことではないかと思う。今回、啓発とは何かを改めて考え、認識できたことを今後の道南分会の活動につなげたい。

たくさん子どもたちの幸せのために！
子ども達が、笑顔でいられるために！

おわりに、社団法人 公共広告機構の関係者の皆様、株式会社 電通中部支社の制作者の皆様、全国の新聞社の皆様と、広告にご協力して下さったひろと君とかねすけ君とご家族の皆様、そしてアンケートに快くご協力下さった道南の多くの関係者の皆様に、深く感謝申し上げますと報告と致します。

2007年 1月

(社)日本自閉症協会
北海道支部 道南分会